

## 「大龍」について ④

おやさと研究所教授  
佐藤 孝則 Takanori Sato

明治20年、横浜で日本初の水道が開設された。道路脇の公共用水飲み場としての「共用栓」の開設である。「共用栓」から新鮮な飲料水が出てくる画期的な試みである。ちなみに「共用栓」とは共同で使う「水道栓」のことで、「水栓」、すなわち「蛇口」を意味する。

安政6(1859)年の開港当時、横浜は集落100戸ほどの寒村だった。開港とともに埋立地は広がり、近代化と都市化が推し進められた。当然、インフラ整備も進められたが、弱点は水だった。掘っても掘っても、井戸から出てくるのは「塩っぱい」水ばかりで、飲むことができる井戸水は当時2カ所しかなかったという。そのため、郊外の湧き水が商売として成り立っていたのも頷ける。日本初の水道が近代化都市・横浜に開設されたのも、当然の結果といえる。横浜は、まさに30年足らずで、近代日本の先駆け都市に変貌したのである。

## 「龍口」から「蛇口」へ

日本初の水道に使われた「共用栓」は、当時、イギリスから輸入したライオンの頭部を象った「獅子頭共用栓」だった(図1)。ヨーロッパでは、ライオン(獅子)は人間にとって貴重な水を勝手に飲まずに番をする有益な動物と考えられ、「水の神」と思われていたからである。明治20年には143基が、最盛期にはおよそ600基が設置されたという。



図1 横浜開港資料館中庭に設置されている「獅子頭共用栓」のレプリカ。横浜開港資料館のホームページより。

その後、共用栓の国産化が促され、それまで輸入していた「獅子頭共用栓」に代わるものが検討されることになった。ヨーロッパの「水の神」がライオンであれば、日本の「水の神」は龍であることから、龍をモチーフにした共用栓が開発され、できあがったのは「龍口付き共用栓」だった(図2)。

「龍神」は「水の神」と同義だと前号で述べたように、『日本書紀』では「水神」は「みづのはのめのかみ 罔象女神」、『古事記』では「みづのはのめのかみ 弥都波能売神」と称され、また「おかのめのかみ 龍神」あるいは「たかおかのめのかみ 高龍神」とも称されていた。朝廷より特別の処遇を受け、奉幣を受けられる神社「二十二社」のうち、伊勢神宮を除く21社はすべて畿内に鎮座する神社である。そして、そのうちの1社は奥吉野に鎮座する「丹生川上神社」である。この神社には「水神」「龍神」が祀られており、現在、上社・中社・下社に分かれている。上社の祭神として「高龍神」が、中社は「罔象女神」が、下社



図2 東京都水道歴史館に展示されている「龍口付き共用栓」(左)と、今日ふつうに使われる水道の蛇口(右)。

は「くらおかのめのかみ 闇龍神」が祀られている。

朝廷だけでなく、一般の神社や庶民の間にも、「龍王社」や「龍穴神社」での祈雨・止雨神事など、「水の守護」を司る神に対する信仰は根強く、幕末、明治、大正まで長く続いてきたと考える。既述した「龍口付き共用栓」は、明治時代後期から大正時代にかけて、実際にあちこちに設置されていたことから類推できる。

ただその間に、当初呼ばれていた「龍口付き共用栓」は、「蛇体鉄柱式共用栓」へと名称が変更されていた。つまり「龍口」から「蛇口」へと(図2)、「共用栓」の名称や形状は変更されたのである。

## 「龍蛇信仰」

「龍口」と「蛇口」は同義とされるように、日本では昔から「龍」と「蛇」は同類と考えられてきた。

「出雲大社」では、陰暦10月11日から1週間、八百万の神々が全国から集まって会議をおこなうとされている。この会議の前日(同月10日)、これらの神々を、祭神である大国主命の神使とされる「龍蛇」が、出雲大社の西側に位置する「稲佐の浜」へ先導してくるといふ。そしてこの会議の期間に、大社では「神在祭」の神事が執りおこなわれ、「龍蛇」が奉安されるのである。

「龍蛇」と称される生きものは、ほとんどが牙や肉にも毒をもつウミヘビの仲間、セグロウミヘビで、「神在祭」のころ、暖流に乗って出雲大社近くの海にやってくる。そして、付近の海中で数頭の幼蛇を出産する。爬虫類ではあるが卵胎生であるため、上陸せずに海中で幼蛇を産む。成蛇の全長は60～90cm、尾は魚の尾びれのように扁平で、背面は黒く腹面は黄色を帯びている。完全に海に適應したため、陸地に打ち上げられると身動きが取れず、ほとんどはそのまま死ぬ。「神在祭」のころ、陸に打ち上げられた個体は「龍蛇」として奉安されるのである。

古の人たちは、陸上では見たことがない蛇に、龍を重ね合わせたのではないかと。龍のような蛇、まさに「龍蛇様」をイメージしたのではないだろうか。まさに「龍蛇信仰」である。

毒蛇が畏敬の対象になるのは、マムシの場合と同じである。毒蛇への畏怖心が蛇を龍の姿と重ね合わせ、さらにそれを大きな存在へと膨らませたものが「大龍」ではないかと考える。